

東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会

第1回議事録

平成30年1月15日（月）16時30分～

TKP上野駅前ビジネスセンター4階

カンファレンスルーム4A

【赤羽事務局長】 皆様お待たせいたしました。まだ中根委員が若干遅れていらっしゃいますが、こちらに向かっているというご連絡がありました。定刻となりましたので、これより第1回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会を開会させていただきます。

皆様お忙しい中、ご出席をいただきましてありがとうございます。懇談会の事務局を担当しております事務局長の赤羽でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本会議は、本日が初回となりますので、座長選出までの間、私が進行役を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

また、本来であれば委員の皆様お一人お一人に委嘱状をお渡しするべきところではございますが、時間の関係がございますので、皆様のお手元に配付させていただきましたのでご容赦いただきたく存じます。

まず、定足数の確認でございます。ただいま、9名のご出席をいただいております。東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会設置要綱第4条第2項に定めず、委員総数の過半数の出席という会議開催に必要な定足数に達しておりますことをご報告させていただきます。

なお、本懇談会は、設置要綱第6条にございますとおり、公開で行うものとされておりました、資料及び議事内容につきましても、原則公開となっております。特にご意見がなければ公開とさせていただきますが、よろしいでしょうか。

（「はい」との声あり）

【赤羽事務局長】 ありがとうございます。それでは、公開といたしまして、資料及び議事内容を都響のホームページに掲載させていただこうと思っております。

また、傍聴の方は録音、録画は原則としてお控えいただきますとともに、委員の発言に対する賛成、反対の表明または拍手など、議事進行の妨げとなるおそれがあります行為は

なさないようご協力をお願いいたします。

なお、議事録につきましては、ご発言者の皆様に別途確認をお願いいたしますので、その際はご協力をお願いいたします。

また、ホームページへの議事録の掲載方法につきましては、事務局にご一任いただきまして、後ほどご選出いただきます座長、副座長とご相談の上実施させていただこうと思っております。

それでは、まず初めに理事長の近藤よりご挨拶申し上げます。

【近藤理事長】 皆様、こんにちは。東京都交響楽団の理事長、近藤誠一でございます。本日は、大変お寒い中、そしてご多忙の中をこの有識者懇談会にご参加いただきましてまことにありがとうございます。

私の持ち時間、3分と書いてございます。手短かに申し上げます。

都響ができたのは、64年のオリンピックのレガシーという感じで、65年でございます。50年が過ぎまして、53年目でしょうか。しかし、今年はまた重要な年でございます。明治開国150年ということで、ヨーロッパの文明が、そして文化が津波のように日本に押し寄せてきた。そんな中で、もがきながら日本が近代国家の道を歩み、欧米の文化・文明を吸収し、自分のものにし、しかし日本人であること、日本人の伝統的な精神性、思想を何とか維持しながらこれまでやってきた、そのことを振り返るちょうどいいきっかけではないかと思えます。

西欧から入ってきたさまざまな文化の中でも、クラシックというのは、日本人が多分最も愛しているジャンルではないかと思えます。それを、わずか150年で日本人がここまでこのレベルまでそれをこなし、日本のオーケストラ、あるいは演奏者として世界に名をはせている、これは素晴らしいことだと思います。今後、日本人として、交響楽団をどういう方向に持っていったらいいのか、ちょうどこの機会に、ぜひ今日お集まりいただいた有識者の方々に将来に向けてのご意見を賜りたいと思います。

こうして、委員の方々の顔を拝見していると、本当にこの種の有識者会合を開き、そしてご提言をいただくには、これ以上ふさわしいメンバーはないと思う、大変な豪華な顔ぶれになりました。皆様方、忌憚のないご意見を拝聴し、今日、明日へ向けて、また2020年という当面の課題もあります。日本の2020年に向けて、都響を世界の都響にしたいと思っております。ぜひ皆様からの建設的なご意見、もちろんご批判もいただきますけれども、ご意見を頂戴したいと思います。どうかよろしくをお願いいたします。

【赤羽事務局長】 ありがとうございます。

続きまして、委員の皆様をご紹介申し上げます。次第を1枚おめくりいただきまして、お手元の資料1の委員名簿をご覧ください。名簿は、五十音順に記載しておりまして、本日もその順番にご着席いただいているところでございます。

まず、池田卓夫委員でございます。

石田麻子委員でございます。

片山杜秀委員でございます。

後藤菜穂子委員でございます。

住吉美紀委員でございます。

澤和樹委員でございます。

堤剛委員でございます。

中根猛委員でございます。

湯浅真奈美委員でございます。

吉本光宏委員でございます。

どうぞよろしく願いいたします。

続きまして、当楽団の幹部を紹介させていただきます。

音楽監督の大野和士でございます。

芸術主幹の国塩でございます。

経営企画部ゼネラル・マネジャーの坪内でございます。

演奏統括部ゼネラル・マネジャーの栗盛でございます。

広報営業部ゼネラル・マネジャーの佐野でございます。

それでは、音楽監督の大野より一言ご挨拶をさせていただきます。

【大野音楽監督】 本日はお集まりくださいまして、本当に心から感謝を申し上げたいと思います。

私のほうから、1点、2点とお話をさせていただきたいと思っております。まずは、これが日本の交響楽団のある意味で運命のようなところでございますが、東京都交響楽団は、ただいま東京文化会館の地下室の練習場で常時練習をしておりまして、東京文化会館で公演はしているんですけれども、東京文化会館で、例えばリハーサルが舞台の上でできるわけではありません。東京文化会館というのは別の組織でございまして、非常に人気の高いホールでもありますので、なかなかそういう意味では、東京都交響楽団が東京文化会館と

の共同作業として定期演奏会などを共催するというような形は、また取るに至ってはおりません。そしてそれは、繰り返しますけれども、日本の多くの、ほとんどと言ってもよろしいと思いますけれども、オーケストラの現状でもあります。練習場と弾くホールが違々と。

ちなみに私どもは、今日は、東京文化会館が点検日であったことによりまして、ミューザ川崎で、3日間続けて練習するということが、今、できているんです。内容はメシアンのトゥーランガリラという、舞台上に大変な人数を要する曲の練習を今日開始したところなんです、ステージで練習できるのが、これに勝ることはないのでありまして、そこでいろいろなニュアンスとか、バランスとか、そういうことが空間的な観点からも、音響的な観点からも、これに越したことはないのであります。

ところが、なかなかそうした、3日間も舞台の上でできて、そしてしかもそれが練習だけではなくて、そのままそれを本番を行うというような状況というのは、なかなか本当に難しいですね。

私は、海外でのいろいろな経験とかあるいはオペラ劇場での経験をもとに申しますと、こういう状況というのは、交響楽団を語る際には、大変難しい問題であると言わざるを得ないわけでありまして。ほとんどの、私が今まで客演をしまいいりました、あるいは今活動を一緒にしているバルセロナのシンフォニー・オーケストラも毎日毎日会場で練習しているんです。そしてそこで本番をするとそれによって、自らのホールでの響きというものから、共鳴と言うんでしょうか、そういう形でオーケストラの音はどんどん成熟してくるということが、これは常套でありまして、そういう状況からほど遠い状況というのが、大変懸念をしているところでございます。

その一方、東京文化会館でそういうなかなか共催という形にはできないというところから、さまざまなホールの方々と、例えば、サントリーホールではもう何年も続けさせていただいておりますけれども、港区の4年生の子供たちを1,500人招待をして、それはサントリーホールが招待して下さるわけですが、そこでワークショップを施した子どもたちと、先日は第九の一番有名な歌詞を、1,500人の子供たちが何とドイツ語で歌ったんですね。それを、合唱の響きで遊ばしようというタイトルでこの演奏会を行ったんですけれども、最初の1人の声から2人の声、二重唱、そして合唱、プロの合唱団を聞いてもらって、その後、都響の楽団と会場の子供たちが一緒になって“Freude, schöner Götterfunken...”と歌ったわけです。それに参加している楽団も合唱団のほうも非常に心

を打たれて、涙腺が緩んだと言った人たちもたくさんいるぐらいでして、大変そういう意味では、教育もやっている立場からしますと、とても良い時を持てたと。そして、子供たちにこれから期待するところは大きいということをまざまざと感じたわけでございます。

ホールとオーケストラがそういう形で一体化することによって、ただ単にオーケストラ自身の芸術性の向上があるだけではなくて、そこでホールが例えば、いろいろな教育に関する部分、あるいは、ハンディキャップの方に対するプログラム、あるいはお年寄りに対するプログラム、さまざまなプログラムを楽団と共有して行うことによって、恐らく社会的な意味での交響楽団のあり方というのも従前に発展が可能なのだろうなというのは、常々感じているところでございます。

こうした現状を鑑み、東京都交響楽団としては、楽員全員その思いでいっぱいになりまして、とにかく自分たちがより良いオーケストラでありたいということとともに、より幅広い方々と接して、そして音楽のすばらしさを広めていきたいと、そしてそのためのいろいろな共同の関係、共作をしていくという関係を、いろいろな形でこれから携えていきたいと思っております。

そういうことで、皆様方からのいろいろなお知恵を拝借した上で、今後の未来を描いていけたらと思っておりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

【赤羽事務局長】 どうもありがとうございました。

大変恐縮でございますが、大野音楽監督は予定がございますので、ここで退席とさせていただきます。

(大野音楽監督退席)

【赤羽事務局長】 それでは、座長の選出をお願いしたいと思います。

設置要綱第3条によりまして「座長は、委員の互選による」こととなっております。委員の皆様のご意見を頂戴したいと思いますのですがどなたかよろしく願いいたします。

澤委員、お願いいたします。

【澤委員】 演奏家としてもそれから教育者としても、大変長い間にわたりまして、日本の楽壇をリードして来られ、今は財団の理事あるいはホールの館長もされていらっしゃる、堤先生にぜひ座長になっていただければと考えますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【赤羽事務局長】 ありがとうございます。それでは、「異議なし」というお声をいただきましたので、堤委員、お願いできますでしょうか。

ありがとうございます。堤委員が座長に選出されました。座長席のほうへお移りいただければと思います。

それでは、早速で恐縮でございますけれども、座長から一言ご挨拶をいただきたく思いますのでお願いいたします。

【堤座長】 堤でございます。このようなとても大事な会の座長としては、甚だ力不足の私でございますけれども、皆様よりご推薦いただきましたので、私なりに最善を尽くしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

【赤羽事務局長】 ありがとうございます。それでは、以後の進行は座長にお願い申し上げます。よろしくをお願いいたします。

【堤座長】 それでは、まず副座長の指名を行いたいと思います。

皆様のお手元でございます、設置要綱第3条第2項におきまして「副座長は座長が指名する」こととなっております。私は、これまでのいろいろなご経験から、吉本委員に副座長をお願いしたいと思いますが、よろしゅうございますでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【堤座長】 よろしいですか。

【吉本委員】 はい、ではよろしくをお願いいたします。

【堤座長】 では、こちらの席にお移りいただきたいと思います。

【吉本委員】 どなたかが異議ありとおっしゃっていただくのを心待ちにしておりましたが、堤座長を補佐しながら、少しでも意義のある意見交換ができればと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

【堤座長】 ありがとうございます。それでは、続きまして、事務局から配付資料の確認をお願いいたしたいと存じます。

【赤羽事務局長】 それでは、お手元でございます資料、ご説明させていただきます。表紙は、本日の次第でございます。

おめくりいただきまして、資料1が懇談会の委員名簿、資料2が設置要綱でございます。参考資料といたしまして、黄色のフラットファイルに、当楽団の基礎資料、楽団の概要、事業報告等をとじ込んだものを置かせていただいております。このファイルは、次回以降も必要の都度、使用することにしたと思いますので、お帰りの際は、おさしつかえなかったら机に残しておいていただければ、事務局でお預かりさせていただきます。次回またご用意をさせていただこうと思っております。

その他、1月から3月の公演のチラシを置かせていただいておりますので、不足等がございましたら、どうぞお知らせいただければと思います。

資料についての説明は以上でございます。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

それでは、早速議事に入りたいと思います。

まず初めに、当楽団の事業の概要を事務局より説明していただけますでしょうか。

【赤羽事務局長】 それでは、まず当楽団の事業の概要を説明させていただきます。フラットファイルをお開きいただきまして、1ページ目が概要ということで、設立の経緯ですとか、現在の組織としての体制などを記載しておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

1枚おめくりいただきますと、29年度の事業計画の概要として、表題が水色のA3のペーパーがございます。この右側が一覧となっておりますので、こちらでご説明をさせていただきます。

自主公演等は、皆様既に御存じだとは思いますが、自主公演の中の定期公演、A、B、Cの3コース、また、馴染みやすい曲をプログラム化しておりますプロムナードコンサート、そのほか特別演奏会、こちら、第九などを演奏しているものでございます。そのほか、共催・提携公演、これは、各ホール等との連携ですとか、被災地支援等の演奏です。また依頼公演は、他の団体等が主催する演奏会への出演となっております。また、青少年のための演奏といたしまして、音楽鑑賞教室を実施しており、こちら都内の教育委員会と協力いたしまして、小中学生を対象にオーケストラの音楽をお届けするというものでございます。そのほか、マエストロ・ビジット、今年度は、大野監督が中学校を訪問し、直接ご指導した特別授業でございます。

音楽アーティスト交流教室というのは、楽員OBが学校等からのお求めに応じて訪問し、演奏指導等を行うといったものです。その他小規模演奏会といたしまして、カルテットが演奏することが多いのですが、なかなかオーケストラを聞きに来られないような多摩島しょ地域、また福祉施設、病院、被災地などに出向いて行って演奏をし交流を深めているというものでございます。

以上が29年度の事業概要でございます。28年度の事業概要のところにこの実績をまとめましたカラー刷りの資料がございます。この28年度は、これら演奏を大小含めまして219回実施し、総入場者数17万4,167名の方々に音楽をお届けしたということで

ございます。29年度もほぼ同じような規模で演奏しているところでございます。これら、詳細につきましては、次のページに回数や入場者数などの記載がございますので、ご参考になさっていただければと思います。

大変雑駁ですが、以上でございます。

【堤座長】 どうもありがとうございました。ただいまの説明に関しまして、確認したい事項やご質問等がございましたらお願いしたいと思います。また、ご意見につきましては、後ほどのご発言の中でお願いいたしたいと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、続けさせていただきます。

本日の懇談会は1回目でございますので、各委員の皆様から、オーケストラの現状や将来展望等について、ご専門のお立場や、日頃お感じになっていることなどを、5分程度でご発言をお願いしたいと思います。全員の皆様にご発言をお願いしたいと思いますので、恐縮でございますけれども、簡潔をお願いしたいと思います。また、ご質問やご意見につきましては、全員のご発言が終わってから時間を取りたいと思っておりますので、よろしくご協力のほどをお願いいたします。

それでは、初めに私からお話しさせていただこうと思います。実はハイドンの告別交響曲みたいな感じになってきていますけれども、本日、所用により、17時30分頃に中座させていただきますので、申しわけございませんが、最初に発言させていただきます。

さまざまなご意見や、サジェスションとかアイデアがおありになると思いますが、私、演奏家としての立場から一言申し上げたいと思います。特に、器楽の演奏家ですので、オーケストラに直接関係したものを3点ほど述べさせていただきたいと思います。

第一に、まず、オーケストラのメンバーの方に、もっとプライドを持っていただきたいと思っています。それは、もちろんオーケストラプレイヤーとしてのプライド、そして東京都交響楽団の団員としてのプライドを、もっと強く持っていただきたいと思っております。

私、立場上、サントリーホール館長ということもありまして、いろいろなオーケストラを聴き、そして見ております。特に感じるのは、海外のオーケストラ、特に強調すれば、ヨーロッパのオーケストラのメンバーの方を見ておきますと、もちろん演奏もそうなんですけれども、非常に自分たちのオーケストラ、自分たちの演奏、自分たちの考え方、いろんなことに対してプライドを持っているということをすごく感じます。それが演奏にも表れてくるんじゃないかなと思います。

最近、本当に都響のメンバーの方々の実力はすばらしいですし、いろんな意味で日本のオーケストラ全体のレベルが非常に上がってきましたけれども、もっともっと自分に自信なり、プライドを持ったら、もっと何か新しいいろいろなすばらしいものができてくるんじゃないかなというように、私は感じます。

それから、プライドということに関係するかもしれないですけども、やはり待遇の改善だと思います。都響は、国内のオーケストラとしてはいいほうだということは、もちろん私よく存じ上げておりますけれども、これだけすばらしい、そして意義深いことをして、そのために自分たちは大事にされているのだ、そういうことがプライドということにも結びついてくるのではないかなと思いますし、よりすばらしい、良い仕事をすることに結びついてくるのではないかなと思います。こういうものは、いろいろな理由があるかもしれませんが、一つ大事なものとしてお考えいただけたらと思います。

一昔前ですけども、アメリカのあるオーケストラが来日したときに、日本のオーケストラの団員が、あなたたちの給料はどれぐらいなのだと聞いたらしいんですね。そして、数字が出てきたらしいんですが、そしたらその人は、何だ俺たちと余り変わらないじゃないかと言ったらしいんですね。でも、だんだん話しているうちに、どうもアメリカのオーケストラの人たちの言った金額というか、数字は週給であって、自分たちの日本のは月給だったと。今はそれほどだとは思わないけれども、まだまだ、ベルリン・フィルであるとか世界のトップオーケストラ、都響もそういうことを目指していると思いますので、待遇の面でも、もっともっといろんな意味で厚遇していただけたら、もっとすばらしいものができるのではないかな、と思います。

それで、3点目ですけども、私としては、オーケストラとしての特色、差別化という言葉が最近非常に流行ってはおりますけれども、もっと出してほしいというのが、私の偽らざる期待でございます。ウィーン・フィルほどいかになくても、独特のものを打ち立てていただきたい。ある意味で、アイデンティティというのでしょうか、それがもっとほしいなということが私の考えなんですけれども。少し聞いただけでも、あっ、あれは都響の演奏だ、と分かるぐらいの特徴あるカラーというか、音色なり、表現なり、そういうものがあつたらもっともっと支持者も増えるだろうし、ファンの方ももっともっと自分が、これほど都響をサポートしているんだと、そういうものに、もっと大きく言えば東京都、日本、いろんな意味で大きな財産になるのではないかと思います。

私といたしましては、きょうはこの3点を申し上げたいと思いますので、以上ですけれ

ども、皆様にお考えいただけたらと思います。

それでは、続きまして、以降は名簿順にお願いしたいと思います。

初めに、池田委員よろしくお願ひいたします。

【池田委員】 座ったままで失礼いたします。池田です。

個人的なことですが、中学を出て、高校に入ったころでしょうか、自分の人生で最初に定期会員になったオーケストラで、こういう仕事を新たにさせていただくことを、非常に嬉しく思っております。当時は、渡邊暁雄音楽監督の時代でした。来年は渡邊先生の生誕100年に当たります。当時、日本フィルハーモニー交響楽団の創立者として、NHK交響楽団に代表されるドイツ音楽偏重、明治維新以降のドイツから主とした音楽教育を導入したということで、ドイツ一辺倒だった日本のオーケストラ界にあって、ご自身のルーツ（母親がフィンランド人）がある北欧音楽、それからニューヨークジュリアード音楽院で学ばれたということでアメリカの近代音楽、そしてフランス近代音楽、さらに新作の委嘱などで、日本のオーケストラの文化を大きく変えられた方がちょうど、音楽監督・常任指揮者でした。先日、ハンヌ・リントウの指揮で演奏したシベリウスの「クレルヴォ交響曲」やデリック・クック完成版によるマーラーの「交響曲第10番」ほか、現在では日本のオーケストラにとって重要なレパートリーの多くが、渡邊さんと都響によって初演されていた時代でした。

そして何より貧乏学生にはありがたかったのは、プロムナードコンサートの前身のファミリーコンサート。これは入場料が500円と1,000円でしたし、東京文化会館での定期演奏会も1階の1列目が、SとかAじゃなくて学生席だったんですね。これが500円でした。第二次オイルショックで750円になったので、事務局に文句を言いに行ったのを覚えています。さらに当時はインターネットのない時代ですから、新聞折り込まれた東京都の広報紙にしょっちゅういろいろ催し、都民の日とか防災の日とか、いろいろあったんですけど、往復はがきで申し込むと、特別演奏会、その都民の日の演奏会ですとか、ジャン・フルネさんや暁雄先生とか、一流の方々をただで聴ける機会が物すごく多かったです。

東京オリンピックのレガシーと近藤理事長はおっしゃいましたけれども、都民のオーケストラとして、非常に身近な存在であった。確かに演奏水準は現在とはまた違うものですが、そして特に読売日本交響楽団が高待遇で楽員を他の楽団からスカウトして発足し、都響発足は読響の直後だったので「ああいうことは絶対してはいけない」と音楽業界

から釘を刺され、新卒音大生を中心に発足したこともあって、テイクオフに少し時間がかかったそうです。さんざんみんなをハラハラさせながら、だんだん良くなったころ、しかもとても安く聴けたということが、私の原点にあります。

そうした目で見ると、現在は大変立派な演奏をなさっているんですが、ちょっとハイブローになり過ぎたかなという気がいたします。二つの意味のアクセシビリティということを上申したいんですが、まず、そういった、ただで聴ける演奏会がちょっと減っているんですね。それで子供のためのといった、例えばサントリーホールで港区と一緒にやっている「小4のためのコンサート」はとってもすばらしく、何度も拝見しましたが、普通の演奏会を普通に聴くということも一方では必要だと思うんです。子供のためにオーダーメイドされたものではなくて、ちょっと背伸びして大人の演奏会、こういうのを低廉な価格で提供するというものが、あまり質を伴わない形で放置されている。

私、東京音楽コンクールの本選審査委員も6年間しました。その優勝のソリストを使って、自主運営の4オーケストラが「フレッシュ名曲コンサート」を言うのを周辺部のホールでやっているのですが、ホール側のリクエストで指揮者、ソリストは決まります。結局、放っておくと小林研一郎さんと西本智美さんばかりにリクエストが集中してしまう。私の世代は暁雄先生とか、フルネとか、コシュラーと、それなりにいい指揮者で聴けたことの影響が大きかった。普通のスタイルで大人が聴いても唸るような演奏会のアクセシビリティをもうちょっと、改善してほしいですね。

今年の秋で定年退職するまで37年と6カ月新聞記者をやってきたことになります。音楽のことを雑誌に書くようになったのは高校2年からですから、これも、もう40年以上やっているわけですけども、広報戦略がひたすらチラシ中心というのは、変わりません。リサイクルをしていますとか、みんな言い訳するのですが、非常にアナクロだし、環境にも優しくないですね。武蔵野市民文化会館みたいに、文字だけで作ると非常に安いんですけども、逆に個性を主張しています。そうじゃないところはきれいきれいに、私の妻はデザインの先生で「世界のデザインの水準からいくと非常にださいものを、お金をかけてクラシックはつくっている」といいます。一度、旧新星日本交響楽団と共同で調べてもらったのですが、何枚のチラシを配れば定期会員、1回のお客でなくて、定期会員を獲得できるかというのを調べていただきました。結果は、よくても大体800枚に1人。こんな効率の悪いこと、環境に悪いこと、サントリーホールも廃棄に一日何十万円と使っているんですね、引き取り業者にね。さらに、コンサートサービスという会社がチラシ配布

をほぼ独占しておりまして、ビニール袋の質も向上については涙ぐましい歴史があって、ガサガサするのがほとんど音のしないものになったんですが、ホールの中に入ってこれをガサガサ読む人というのは、止めることができないのです。東京フィルハーモニー交響楽団はそれがトラブルとなって入り口での配布を一切やめ、会場の中にチラシを置いているだけです。いかにジジババ産業とは言え、チラシが広報戦略の中心というのは改めていただきたいというか、改めなくてはいけない時期にきていると思います。

ソニーの大賀典雄元会長が、東京フィルの理事長でいらした最晩年、楽天の三木谷浩史会長兼社長を口説きに行ったのは二つの理由からでした。一つは新しい産業セクターの人がクラシカルなカルチャーにお金を出す先例を担ってほしいというミッション。もう一つは、楽天のインターネットのノウハウで広報戦略を刷新してほしいということでした。後に三木谷さんは東京フィルの理事長になりますけれども、依然として、広報の中心はチラシなんですよね。しかも非常にありがたかったですけれども、「日本経済新聞」に見開きカラーで東フィルの広告を出してくださいました。やっぱりネットでは、お客さんは来ないのでしょうか？でもベルリン・フィルハーモニー管弦楽団みたいに、広報戦略は勇猛果敢にやっていただきたい。さっきの堤先生のお話と重なりますけれども、広報戦略でも世界のトップのベルリン・フィルが広報でもトップランナーということは、非常におもしろいと思うんです。放っておいても客が来るのに、熱心にやっている。

ここでもう一つ忘れてはいけないのは、視覚障害者とか聴覚障害者、そういう方が、今、昔は誰かに電話を頼んだりしてチケットをとってもらえたが、今は全部ネットになっちゃって「買いづらくなった、何とかしてください」という電話をときどきいただきます。バリアフリーということも、ぜひ考えていただきたいですね。

東京は今、外国人指揮者も交えてオーケストラ豊穡の時代になってきまして、大野和士さんもプロの指揮者になって最初のオーケストラが、都響でしたから、現在は音楽監督としてももっともっと、「大野と都響」の顔が出ることを祈ります。まだ30歳のアンドレア・バッティストーニと東京フィルとか、ジョナサン・ノットと東京交響楽団、それからこの間のメシアンのすごい演奏会をやったシルヴァン・カンブルランと読響といったコンビネーションに比べると、大野さんと都響はちょっとハイブロー。ハイブローという言葉をさっきから何度も使いますが、その一方では、何といても唯一のミュニシパルのオーケストラという視点から、別のアクセシビリティも考えていただきたい。

最後に、メンバーのプライドとおっしゃいましたけど、楽員さんも一人一人が音楽家と

ということで、アウトリーチにすごく熱心な音楽家の方、大ソリストにも最近は多いので、もうちょっとお客さんと触れ合う時間を躊躇しないほしい。私が学生のころは、楽屋を訪ねると、一般の人と触れ合うのを避けるように、さっといなくなっちゃう。ものすごく着がえも早くて、聴衆と同じか、それ以上に早いタイミングで駅のホームにいたりする。交流を意図的に避けているんじゃないかというメンタリティをかなり色濃く、日本の楽員さんには感じておりました。

それが、今は、例えば山形交響楽団のように、定期演奏会が終わった後、ジュースしか出ませんが、楽員さんと指揮者とソリストがアフタートークでロビーに残るとか、これは札幌交響楽団もやっていますし、一昨日も日本フィルは横浜定期のシーズン最後の演奏会ということで、定期会員でない人も誰でもいいから参加できる、そういった終演後のレセプションをやっていました。都響はいわゆる西洋型のアウトリーチで、学校に行くとかいろいろよくやってらっしゃるんですが、普通の定期公演の前後で聴衆と触れ合う機会がミュニシパルのオーケストラにしてはちょっと少ないのではないかと、こんなことをつらつら感じております。

最後ですけれども、渡邊さんもそうでしたし、その後のモーシェ・アツモンさん、おとし名古屋フィルの名誉指揮者としてご自分でキャリアに幕を引かれましたけれども、都響に最初に来てから引退されるまで私、アツモン先生とは39年間、個人的におつき合いました。マエストロが都響の首席指揮者だった時代、私たち音大生でも何でも一般学生が長期滞在先のキッチンつきマンションに訪ねていくと非常に歓迎してくださり、いろいろ音楽の基礎的なことを全く無償で教えてくださった。これが、自分の今の仕事の基礎にもなっております。そのような方と引退まで39年つき合えたということは、本当に自分にとって貴重な財産です。じかの触れ合い、長い時間をかけての信頼関係の構築について、いま一度、音楽家同士で話し合う。しかもごく一部の通の人と話すのではなくて、指揮者や楽員が東京都民の中にもっともっと入っていく努力をすべき時期なのではないかと思えます。

ちょっと長くなりましたけど、こんな感じです。ありがとうございます。

【堤座長】 池田委員、どうもありがとうございました。では、次に、石田委員お願いいたします。

【石田委員】 石田でございます。この懇談会は、今回初めてですか。こういうことをされるということで、都響さんの何か決意のようなことも感じます。余り勝手なことを申し

上げていけないかなと思いつつ、私も堤先生に倣うわけではございませんが、3点ほどお話をさせていただきたいと思います。

1点目です。オーケストラというのは、言葉は悪いですけど、何を商売にしているのか。やっぱり夢を売るというようなことだと思うんですね。そのときに、夢を売ってますと言っても伝わらない。じゃあ、どうするのか。自分たちが持っているストーリーのようなものというのを、きちんと相手に伝えていく、そういったことが不可欠だと思うんですね。

じゃあ、そのストーリーをどのように都響が持ち得るのかという分析を、これからしていかなければいけない時期にあるんだと思うんです。それをどうつくっていくのか、私は、既にある財産を掘り起こしていくという作業が必要だと思うんですね。都響のもちろん50年にわたる歴史も重要です。大野さんという世界的な指揮者を迎えていらっしゃるということも、ストーリーの一つの柱になると思います。

この間、新国立劇場の新しいラインナップのメディア発表会に伺いました。「あっ、新国変わるかも」と期待する何かが見えてきたんです。いろんな縦糸と横糸が。新国自体の色が、もしかすると変わってくるかもという予感をさせてもらう結果になりました。

じゃあ、今、都響はどうなのか。そういったところをこれからどうしていくのかと、真剣に考えていくということも大切なかなと思っております。

例えば、すごく積極的な、意欲的な作品、指揮者が並んでいる。それが、一つのストーリーになるのでしょうか。加えて例えば、演奏会形式で定期演奏会で取り上げたオペラ作品を、オペラ団体のオーケストラピットで弾いているとかということが見えてくると、都響はそういうことをやっていこうとしているんだなという、一つの方向性が、見えてくるのではないかという気がします。

例えば、戦略的に自分たちの持っているものを見せていく。そういったことがプログラムとして、Aシリーズ、Bシリーズ、Cシリーズそれぞれで具体的に示していくということが必要なんだと思います。その過程で課題も見えてくるでしょう。Cシリーズは、平日のお昼、それから土曜日のお昼にも行われています。お昼というところは同じかもしれないけれども、土曜日と平日に分散していることがお客様の選択をとどませている理由になっていないだろうかとか分析するようなことも必要になってくるかもしれませんね。そういったことを一つひとつやっていくということが大事ではないかなと思っています。

2点目です。都響ならではのお客様がいるという状況がありますでしょうか。都響には、こういう熱いお客さんがいるよねという、お客さんのほうがオーケストラを引っ張ってい

くような。オーケストラだけではなく、あるいはポピュラーのアーティストだってそうだと思うんですけども、お客さんの熱気がこもって、ロビーが熱いという演奏会は楽しいですよ。評論家だけが盛り上がっているのではなく。切符を一般でも定期会員でも買ってくださる方は、わくわくしながらその会場に来ているというのが伝わるじゃないですか。それが、多分、オーケストラの奏者側にも伝わると思うんです。いろんなオーケストラの演奏会に行かせていただけてますけれども、都響にも熱さみたいなことがあるといのかなど、最近思っております。

それから、3点目です。やはり、都の顔としてのあり方です。私も都民なんですけれども、多摩のほうなんです。多摩でも、もちろん活動してらっしゃるのはよく分かるんですけども、多摩で都響というと、ちょっと遠い感じがしてしまいます。いろんなことを忙しくやってらっしゃる中で、多摩もというのは、申し訳ないんですけども、都の顔として、都民からも愛され、支持され、うちには都響があるからねというようなオーケストラにぜひなっていたきたいし、もちろんそれが日本の顔としての都響の将来の姿につながるということになるのだと思います。

先ほどの2点目にもつながるんですけども、お客様の熱気が感じられる、お客様から愛されるようなオーケストラであってほしい。それから、さっきストーリーと言いましたけれども、オケのカラーみたいなこと、堤先生がおっしゃったアイデンティティということだと思うんですが、都響のカラーって何でしょうか。そういったものを考えるということも大事かなと思ったりしております。

あんまり偉そうなことを申し上げられませんが、わくわくしながら、都響の演奏会に出かけられるように、何かお役に立てるといいなと思っております。

簡単ですが、以上で終わらせていただきます。

【堤座長】 どうもありがとうございました。それでは、次に片山委員お願いいたします。

【片山委員】 堤先生から始まって、大体重要なお話は出てしまったような気もいたしまして、5分程度で簡単にとということでしたので、気楽に考えておりましたら、皆さまの大変中身の濃いお話が続いているので、私もとりあえず簡単ながら、言いたいことは少々言おうかなと。

と申しながら、私、何を話せばいいか、結構迷っているところがございまして。私の音楽ファンとしての個人的な気持ちにおいて都響の未来がこうあってほしいというのと、もっと広い見地で日本のオーケストラがどうなっていくのかという中で都響の未来を考える

のと、私としても分裂しております。

まず、個人的なことを申しますと、私は、池田委員よりは、少し若い程度なのですけれども、ちょうど渡邊暁雄時代の終わりのころから都響は存じているぐらいの年齢になります。中学生のころは、100回定期とかも行きました。柴田南雄の委嘱新作とか、ついこの前のような気がするのですが、都響の沿革の資料を拝見しますと、その頃のことは一番頭のほうに書いてある大昔のことで。それからあとがもうこんなに長くなっているのかと改めてびっくりいたします。この後のモーシェ・アツモン時代というのも、池田委員ほどではありませんけれども、私もよく聞いておりましたし、昔の杉並公会堂でモーシェ・アツモンの都響のファミリーコンサートの、モーツァルトのどこでソリストが間違ったとか、チャイコフスキーでアツモンが高揚してとなりのお客さんも舞い上がって足を踏み鳴らしていたとか、いろんなことを思い出します。先ほどこれも池田委員からお話ありましたが、文化会館の1列目は、学生席になっていて、定期会員券で買いますと本当に安うございました。そこでマークやフルネやコシュラーを山のように聞いたのはとても懐かしく自分の音楽体験としてとてつもなく大きかったと考えて居ります。

私はそのころから現代音楽とか、日本の作曲家を聴きたいともう取り憑かれておりました、都響ももっとやるべきだななんて、個人的にはいつもそんなことばかり考えておりました。そういう曲目が入っているときには特に喜んでおりました。

ちょっと話が飛びますけれども、現在の東京都交響楽団にももちろん音楽ファンとしては、委嘱新作が年に二つ三つぐらいあっていいじゃないかとか、そういうふうなものが一つあるべきだとか、日本人の曲や、外国人の曲も新しいものをバランスよく聴き、聴衆もリアルをオンタイムで現代のオーケストラとしての意味を感じるのは、私の個人的な趣味から言うと現代音楽なので、そういうものをたくさんやるべきだというのが個人的な意見になります。けれど、それは本当にそうになってしまうと、お客さんが大幅に来なくなることは、私は、嫌というほど子供のころからよく知っている。がらがらの現代音楽の演奏会に行くのが私の10代のころの日常でした。隣を見ると、1列誰もいないとか、1列あたり2、3人しか座ってないような演奏会が私が中学、高校生のころから行っている普通の現代音楽の室内楽の演奏会のありさまというものでした。その調子でオーケストラが演奏会を開き続けたら、すぐに潰れてしまったり、社会的に必要なのないことをやっているとレッテル貼られたりしてしまいますね。つまり私の個人的な趣味は社会一般では通用しにくい。現代音楽ばかりやってほしいとは、やはり言ってもらえない。ここからは一般論です

が、基本的には世界的にオーケストラはちょっとつらい状況にあると思うんです。

これから先、オーケストラが生き延びていけるかどうかは、私は日本を含めて、欧米も堤先生からも先ほどアメリカ、欧米のオーケストラのお話もありましたけれども、いい時代というのは、欧米の場合でも、かなり終わっていると思うんです。アメリカのオーケストラもどこも大変だということは、いろんなニュースの形で出てまいりますし、ギャラの高い大物指揮者を音楽監督や常任指揮者に雇いきれないような状況がヨーロッパでも現出しております。例えば、ドイツの放送局の諸オーケストラは、かつては現代音楽のファンにとっては憧れの的でした、放送局が公共の文化政策に支えられて、聴衆の多いとは言えない現代音楽に資源を投じて、日本のファンからするとうらやましい限りで、日本も同じようになるとよいのにといつも思っていたものですが、今日ではオーケストラの存続そのものが厳しくなっている。つまりドイツの公共放送がオーケストラをかつてのようには持ちきれなくなっているし、聴衆が少なくとも文化的に有意義というような考え方も通りにくくなっている。それでドイツの放送局のオーケストラも統廃合とか、合併とか、縮小と合理化の波にさらされているわけであります。もちろん遡れば、すでにサッチャー時代にBBCのオーケストラがどんどんなくなっていくとか、いろんなことがありました。そうした傾向がますます顕著であるということです。

こういう時代の中で、ヨーロッパにおいても現代音楽はもちろん、普通のオーケストラ、オペラ、みんな社会的なコンセンサス、お金が、経済的にも苦しくなっている。アメリカではトランプが大統領になるような時代ですから、パブリックというのがいかに後退しているかということは、言うまでもないわけです。

かつての欧米のオーケストラは、お金はかかるんだけど、市民的コンセンサスに支えられて生き残ってきたのでしょ。お客さんからのチケット代だけでは楽団員の給料が賄えないというのがプロの交響楽団という高コストな団体の世界的常識でしょうが、それでも何とか生きてきたのは、西洋クラシック音楽というのは、自分たちのカルチャーだから、支えなくては行けないということで税金が落ちたり、フィルハーモニー協会といった形態で、市民やいろんな企業がたくさんお金を寄付してオーケストラを支えるという伝統が欧米にはあったのが、今ではかなりガタガタになっている。

ベルリン・フィルが一生懸命広報をしているという話もさきほど出てまいりましたが、ああいうスーパーオーケストラは生き残れる率はあると思うけれども、それでも、特定のレコード会社と契約して、高いギャラが出て、どんどん新譜を録音すればいいような時代

はとっくの昔に終わっている。わけで、ベルリン・フィルのようなオーケストラでも、自分たちで広報して、ネットで世界的に見聞きさせて、お金をとるみたいになっている。そういうことができるのは超一流だからであって、超一流でないヨーロッパのオーケストラはどうなっていくかということ、かなりなくなっていくだろうし、縮小していくと思います。まあまあのオーケストラの定期演奏会をネットで有料にして中継しても、ベルリン・フィルのようにみんながお金を払うとは思えませんね。それが現実です。

そういう中で、東京都交響楽団が、しかも自治体のオーケストラとして、今後の日本の中でどうやって生き残っていくのかということは、私、中長期的には、これも容易な問題ではないと存じております。橋下市長のような思想の方が東京の都知事になる確率も、結構あるのではないのでしょうか。2020年のオリンピックが過ぎた後、日本はどうなっていくか、いろいろ不確定要因も多い。その中で、オーケストラなんか要らないんじゃないかみたいなことが、わっと出るような可能性というのは、東京都の場合だって決してないとは言えない。

そういう中で、いかに役に立っているかとかいうことを、これも先ほどからも皆様のご発言のとおりで、東京都民のためにこれだけ役に立っていると、多くの人にこれだけ喜ばれているんだという実績をとにかく地道に積み上げながら、まさに熱いものと石田委員はおっしゃっていたけれども、やっぱり支持している人がこんなにいるんだと、この形を見せていかないと、10年後とかは、私こういう自治体のオーケストラだったらなくなってもおかしくないような状況に、現代の日本というのは突入しつつある。本場の西洋よりもちょっと遅れていると思うんだけど、結局欧米のようになっていくだろうと思うんです。

日本はもともと、アメリカやヨーロッパに比べて、企業とか一般市民が支えようという伝統は薄い。その上、欧米同様、中産階級が壊れてきている。給料がふえていくとクラシック音楽を聴いて、それをステータス・シンボルのように思う、そういう中産階級がいてくれてこそ、クラシック音楽の立つ瀬もあった。ところが右肩上がりの資本主義社会は壊れてきている。今、クラシックを好きというのは、教養を求める中産階級の市民というよりもただのマニアになってしまった。昔は所得が上がっていったって、子供にヴァイオリンやピアノを習わせて、お父さん、お母さんもオケの定期会員で、N響定期会員、都響定期会員、すてきね、みたいなのが豊かな市民の暮らしであったけれども、そういう感覚は薄れてきているでしょう。

世代論で言いますと、昭和40年代に青少年期を過ごした世代からあとはマスとしてはクラシックへのあこがれは、その上の世代に比べると乏しくなると思うのです。やはりロックやフォークの方に世代的に強くシフトしている。だから年をとってもポール・マッカートニーの来日公演に大枚ははたくことがあっても、クラシックに来るとはなかなか思えない。その上の世代は、年をとると余裕ができたなら、クラシックに行きたかったという人がいるわけですが、これは都響の方でも今のお客様の年齢分析とか、よく分析なさっていると思うのですけれども、これから年をとって暇になる人が、オーケストラに来るかという、断層があって、50代、60代ぐらいのジェネレーションはその志向が弱っているはずで、その意味で今後はかなり怖いと思うのです。

そういう中で、オーケストラはどうやって生き残ってゆけるのか、真剣に議論しないとまずい時期になってきたと思います。大野先生はさきほど、オーケストラとは本番をやるホールで練習しないとうまくならないものだから専用ホールをつくるべきとさっき仰っておられました。確かにそれが理想です。欧米ではかつてそれはけっこう当たり前だった。けれども、今は欧米でも余裕がなくなっている。日本は世界から遅れているようで実は世界を先取りしているということが、いろんな分野でよくあるのですが、オーケストラでもそうなのかもしれない。ヨーロッパなんかこれだけ環境がいいとわれわれが憧れていたなら最近悪くなってきてだんだん日本みたいにヨーロッパのオーケストラもなくなってきている。そもそも練習して演奏会もできるみたいな、特定のオーケストラのための素晴らしい専用ホールを、東京のような土地で得られるわけがないのではないかな。いったいいくらかかるのだろう？誰が建設費や維持費を負担するのだろう？田舎に本拠地を移せば可能かもしれませんが、楽団員も定期会員もたとえば多摩の山奥とかに専用ホールができれば通ってくるだろうか。そんなことをいろいろ考えてみるべきでしょう。

日本のオーケストラは昔から苦勞しているわけだけれども、ヨーロッパのオーケストラもこれから苦勞していくような時代になっていく。多分、日本がこれからの欧米にモデルを提供するのではないかな。こんなに環境が悪くても日本ではオーケストラが続いているのではないかな。だったらヨーロッパもできるでしょうと。

ちょっと悲觀し過ぎかもしれませんが、そのぐらい危機感をもって10年後ぐらいのことは考えないといけないだろうというのが、今の私の思いでありまして、これと現代音楽をたくさん演奏すべきだという、私の個人的な趣味とどう両立するか、これは本当に困っているんですけれども、そういう話が、今後みなさんといたせればと考える次第で

す。以上でございます。

【吉本副座長】 ありがとうございます。片山委員のご発言の途中で、無事座長から副座長にバトンタッチさせていただきましたので、よろしくお願いします。

では、続きまして、後藤さんお願いします。

【後藤委員】 後藤です。よろしくお願いいたします。

ふだん、私はロンドンに住んでおりまして、フリーで音楽ライターをしております。今回、本委員会にお招きいただいたのは、外国に住んでいる者の視点から、都響というオーケストラの将来をどういうふうにか考えるのかとか、さきほど堤先生がおっしゃったように、都響がこれからどういうふうにか世界に向けてアイデンティティを打ち出していけるのかということ、そういう視点を求められているのだろうということ、少しでもお役に立てればと思っています。

既に、これまでのお話でも出ましたけれども、オーケストラのアイデンティティの問題というのは私もつねづね考えておりまして、これは都の人たちにとってのアイデンティティと、それから関東、日本におけるアイデンティティ、世界に向けてのアイデンティティというのは、また少し違ってくると思うのですけれども、そうした3つのレベルにおいて、今後もう少し強いアイデンティティを打ち出していく必要があるのかなと思っています。

都のオーケストラという特徴をどう生かすかということだと思わんですけれども、私の場合は、海外ということで考えると、これは本当に都響さんだけではなく、N響さんも含めて、東京はたくさんオーケストラがありますので、私が住んでいるイギリスなり、ドイツとかフランスとかのジャーナリストとかと話していても、日本のオーケストラのそれぞれの特徴というのを彼らが把握しているかということ、余り把握していない。ただし、今は、向こうの指揮者も随分日本に来ていますし、東京にいいオーケストラがたくさんあるということは、ここ10年ぐらいで認知度は上がってきていると思います。都響さんを含めて、海外公演もされておりますので、少しずつ認識は高まってきていると思います。

ただ、私が外国に住んでいて、今後、都響初め日本のオーケストラが外に発信していく上で問題点だと思うことはいくつかあるんですけれども、一つは、英語のウェブサイトの問題。私は日頃から都響さんの英語のウェブサイトをはじめ、東京のオーケストラのウェブサイトの英語がどういう状況かというのをチェックしているんですけれども、都響さんの場合、日本語HPの非常に忠実な翻訳サイトではあるんですけれども、外国に実際に住んでいる人にとって使いやすいかということ、使いやすくない。日本語向けの人を書いてい

る日本語の内容が英語になっているということで、例えばイギリス人がウェブサイトでもオンラインでチケットを買おうとすると、そこはもう日本語のページになっている。英語でチケットが買えない。ならば電話しようかなと思うと、電話番号が書いてあるんですけども、そこにはちゃんと英語で「この電話番号は外国からはかけられません」と書いてある。いったいどうしたらよいのでしょうか？この問題は私もつねづねSNSなんかでも発信しているんですけども。

それから2点目は、日本のオーケストラ全般なんですけれども、動画の利用が非常に少ないこと。都響さんに関してはサイトにいったらYouTubeのページで、割と最近のコンサートの抜粋で一楽章とか、そういうのが載っているという意味では、ほかに比べて多いぐらいかもしれないんですけども、某放送オケのサイトにいっても動画が一つもない。それはもちろん放映権なり、いろいろ問題はあるとは思いますが、ですので、最近の日本のオーケストラの演奏を海外の人は見ることはできない。オーケストラを広く知ってもらう手段として今は動画だと思いたうんですけど、ほとんどなく、ストリーミングも少ないということも日本のオーケストラの現状です。それはお金の問題なり何なり、国営放送ならまた別の問題、法律的な問題もあると思いたうんですけど、たとえばNHKのラジオ、テレビも海外からは視聴できません。また読響のサイトにある動画は、日本にいと多分オンデマンドで見られると思いたうんですけども、これも海外からは見られません。

そういう点で、やはり定期的にもっと英語で、外国の人に向けてどういうふうに発信していったらいいのかという視点が必要です。関心はあると思いたうです、時々向こうのジャーナリストに会うと、今は日本の音楽状況はどういう様子なんだということは聞かれますし、いつか文化庁のほうで外国のジャーナリストを呼んで、日本のオーケストラについてのシンポジウムをやっていましたが、それに参加したドイツのジャーナリストにどうだったかということの後で聞いたりもしたんですけど、関心はあると思いたうです。今後オリンピックに向けて、例えばこの間東京から発信するオペラ・フェスティバルというのが発表されましたけれども、こういうのも外国のジャーナリストに来て取材してもらおうと思いたうたら、本当にざっくばらんな話、お金を払って、旅費を払ってジャーナリストの人に来てもらわないと、放っておいては来てくれない。今までやってこなかったから、予算がないとか、もちろんそういうことは重々承知しておりますが、現状としては、やはりそうしないとしてくれない、書いてくれないことがあると思いたうです。

あとは、最後にやはり日本の音楽、これは片山さんのご専門ではありますけれども、日

本の作曲家の音楽というものをもっと演奏して、そういう形で海外に、外国がやっていないことをやるということで、ストリーミングなり、レコーディングの時代じゃないかもしれないですけども、そういうことで外国に見てもらおうという形があり得るんじゃないかなと思います。そんなに長期的な、10年先の話ではなく、本当に一般的な、今からでもできる話で恐縮ですが。

最後に、都響は私が高校生のときに最初に定期会員になったオーケストラで、しかもちょうど若杉さんになったころだと思うんですけども、ひそかにマーラーの「千人の交響曲」の合唱で歌わせていただいたことをここで告白しようと思います。ありがとうございました。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。席の順で住吉委員に発言をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

【住吉委員】 住吉美紀です。よろしくお願いいたします。

聞かせていただいているんですけど、多分、この中で、私が一番素人だと思しますので、片山さんのお話の中で出てきた中では一般社会に近い立場なのかなと思います。なので、どういう形でプラスの貢献ができるかわかりませんが、私の立場ででき得る限りのことを、せっかくご指名いただきましたので貢献できればと思っています。

発言に当たって、私自身のバックグラウンドを話しておきますと、フリーアナウンサーで20年以上やっているんですが、最初は15年間NHKでアナウンサーをしておりまして、その後フリーランスでやっております。私は小さいころから普通にどの分野というよりは音楽そのものがすごく好きで、いろんな分野に触れてきました。仕事ではNHKでもたくさん、ポップスの音楽番組もしましたし、それ以外の分野も、放送という形で結びつくところが多いんですが、司会とかインタビューとか、いろいろな形で携わってきました。今は東京FMで毎日生放送をしていますので、その中でポップスとか、ロックとか、ジャズとか、そちらの分野の方々とはかなり頻繁にお会いしたり、現状に触れる機会もあったり、好きで聴きにいったりもします。その中から感じるクラシック音楽とか、あるいはみんなにどうやってもっと好きになってもらうかということの視点から、今日はお話をさせていただきます。

三つほど考えたんですけども、一つ、私はまさに私自身が“メディア”となって音楽を出している方とファンを結びつける間に立って、どうやったらもっと聞いてもらえるとか、分かってもらえるとかをずっと模索してきた立場なんですけれども、その中で、

結局、私自身が心から好きになったり興味を持ったりしないと伝わらないということ、本当に感じてきました。じゃあどうやったら自分が今まで全く興味がないアーティストの方や分野を好きになれるかということを探索してきたのですが、結局人って不思議なんですけど、やっぱり知ると好きになるなと感じています。全く興味のなかった分野でも意外にディテールとか、本流じゃないことだったり、もっと専門的というよりは人間として共感できることを知ると、人はすごくそこに親近感や愛着や、愛しさを覚えて好きになってしまうんですね。

私自身は小さいころ海外に住んだりしていたので、日本文化がどちらかという物すごくアレルギーぐらい苦手だったんですが、お仕事で触れる中で、例えば歌舞伎が大好きになって、自分で積極的に、高いお金を払っても観に行きたいと、もっと知りたいという気持ちになったり、あと日本の邦楽とかも、ものすごくそれこそマニアックで分かりにくいところがあるんですけど、歴史とか背景とか、ほかの文化との結びつきなどを知るとすごく好きになって、観に行ってもっと知りたいという気持ちになるということを実感してきました。それを私はお伝えする立場で、ラジオなどでもそういうことをお話しすると、すごく実際に人が足を運んでくれて、コンサートに行くとか、行動が伴うので、やっぱりそうなんだなというふうに感じています。

音楽って本当は感覚的なものだと思うんです。だから、お風呂に入って気持ちいいみたいに、一番いいのは、ぱっと聞いて「気持ちいい」、「好き」と思って大好きになって、いつもオーケストラを聞きに行きたいと思えたら一番いいんですけど、誰もがそんな感性を持っていないとすると、実は違ういろいろなことを知ると音楽も好きになる可能性があるんじゃないか、それをもっと模索する余地がたくさんあるんじゃないか、現状それがもったいないんじゃないかというのをまず感じます。

昨年末に私のラジオ番組と都響でコラボをして、番組のリスナーを20人ほどと一緒に第九を観に来て、みんなでバックステージツアーをしたりという会をしたんですけど、私もこの東京文化会館の説明を聞いたことがなくて、ツアーをしている中で、例えば、ロビーの上は天の川みたいにデザインされているんですよとか、客席に入るところの色がちょっと赤っぽいオレンジ色っぽいのは、溶鉱炉と言われていて、音楽を演奏する皆さんの情熱がここから溶鉱炉のようにあふれ出るイメージですとか、あと、お席のほうからステージから見るといろんな色になっていて、それはステージからメンバーの皆さんが見たときに空席があっても目立ちにくい、だから落ち込まないという配置なんですよとか、そう

いうことを初めて聞いたんですけど、それを知っただけでも音楽がどうのという以前に東京文化会館やオーケストラの世界にすごく親近感を覚えたり、そんな人の思いが詰まっているんだなということで好きになるとっかかりが絶対あると感じました。

だから、本流じゃない、いろんなところでちょっとずつ知ってもらう機会をつくるというのは、地道かもしれませんが効果があるんじゃないかということの一つご提案したい。SNSで何か打ち出すとか。あと私が「来たい」と思えるものとしては、例えばロビーのカフェが狭いし、おしゃれ度がちょっと落ちるので…。あそこをおしゃれなカフェにして、あそこまではチケット持ってなくても入れるようにして、もっと例えばあその空間がコミュニティに直でつながっていれば、来たついでにホールを見て「何かすごいにぎわってる、このステージ。ちょっと来てみようかな」とか、あるいは来ることについての習慣ができるとか、好きな場所になるとかいう可能性はあるかなと感じます。あるいは、リハーサルが見学できるコースとか、そういうのがあったり。あと、お話はもう出ていますけど、もっとプレーヤーの方の顔が知りたい、人が知りたい。「あの人が初めてソロやるんだ。だったら見たい」みたいな、そうやって応援する分野ってたくさんあると思うんですけど、そういうようなことの芽出しというか、できることはまだあるかなと感じます。

2番目が、もっと視野を幅広くということ。先ほどチラシ攻撃の話がありましたが、本当におっしゃるとおりで、あのチラシを全部見るだけでも結構見るほうには負担で、もっと何かいろんな知ってもらえる手段が、まだ全部この場では答えは出なくても、きっとある。それを一緒にしている間に探れたらいいななんていうふうに思います。その視野が自分たちの中になれば、助けを乞うと言うんですか。この有識者懇談会のようなものが今回初めて設立されたと伺いましたけれども、こういうことをやって、ちょっと面倒くさいかもしれないけど聞いてみようみたいなこと自体も、すごく都響が変わりたいのだという決意が伝わってきて素敵なことだと思いますし、それこそメディアだったり、学校の何かだったりとか、人がその先にいるところに助けを乞うて、その先にいる人たちとつながっていくということを、自分たちで全部やらなくてもいいから、やってもいいのではないかなと感じます。

3つ目に、本当にクラシックにさほど詳しくない、好きだけど詳しくないという立場から思うのは、やっぱりクラシックというのはどうしても最低限のことを知っていないと入れないことが多く感じますし、それをまた助長しているのが意外にパンフレットとかチラシを読んでも分からなかったりすることだと思うんです。作曲の歴史とかそういうのを全

部知ったら多分絶対面白いというのもわかるんですけど、分からない人のとっかかりが、すごく少ない気がするんです。一方で、私の仕事の中で感じているのですが、日本人ってすごくまじめで勉強熱心で向上心もあるので、特に女性って、物すごく向学心がある方が多いんです。だから、そういう人たち向けに例えば半年か年単位の、継続的に学べてクラシック詳しくなって、導入になるよみたいな講座なのか演奏会シリーズプラスちょっとしたトーク、などというプログラムみたいなのがあったら、絶対私も含め、周りでも入りたいという人いっぱいいるだろうと思います。例えばワインが好きな人も同じですけど、知れば知るほど皆さん好きになってくる中で、そういう超初心者向けのとっかかりも何かしらつくっていきける可能性、余地はあるんじゃないかなと感じています。

ですが、まだまだ私も本当に素人で、皆様の意見を伺って、とてもなるほど面白いと感じております。ご一緒できる期間、一生懸命貢献してまいりますので、よろしく願いいたします。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。では続いて澤委員、お願いします。

【澤委員】 私は東京藝術大学学長ということでここに座らせていただいておりますけれども、本来はヴァイオリニストで、実は学生時代に渡邊暁雄先生やコシュラーさんの指揮で都響さんとは何度かコンチェルトをやらせていただきましたし、もう時効だから言ってもいいかもしれませんが、コンサートマスターに誘っていただいたこともありまして、そういったこともあり、都響さんは非常に身近に感じていた存在です。

それで、今回呼んでいただいて、昭和40年の東京オリンピックのレガシーとしてつくられたということで、それにしても基本財産100万円というのは、いくら五十数年前でも一けた間違っていないかと思うぐらいですけど、それはともかく、ちょうど2年後に東京オリンピック・パラリンピック、2度目が行われるこのタイミングで、日本というか東京都がホストとして多くの外国の人たちをお迎えするに当たって、都響に期待されるものはすごく大きいと思いますので、こういった有識者懇談会ということはこのタイミングで持たれたのも、そういうところがあるのかなというふうに思っています。

もうこれまでにたくさんの方たちがおっしゃったことを同感に思うことがほとんどですので、かなり言うことが少なくなってきましたけれども、先ほどからオーケストラのアイデンティティということが言われていて、これは都響に限らず日本のオーケストラというのは今はオーケストラの性能としては本当に世界的レベルであると思います。特にいい指揮者を迎えたときの演奏というのはベルリン・フィルや優秀な超一流オーケストラにも負

けない演奏になることはしばしばあると思うんですけども、オーケストラの独特の音が都響にあるかとか、N響にあるかと言われると、なかなか実感として感じられないということも事実であります。

さっきみじくも音楽監督の大野さんがおっしゃっていましたが、練習場所と演奏会場が別というのは、どこのオーケストラも理想と現実の狭間に悩んでいる部分で、やっぱりオーケストラは音をつくる時にホームグラウンドとなる演奏会場で音を作っていくというところが、これはリハーサルの場所と本番が違うとなかなか理想どおりにはいかないというところで、だからといって、そういうふうに文化会館を演奏会の前3日間も独占することというのもまた現実的ではないと思うんですけども、だから諦めるということでもないと思うので、やっぱり理想を追い求めてやっていくべきだとは思いますが。

それで、今まで出たところで、さっき後藤委員がおっしゃった、ウェブの英文のことをおっしゃってましたが、例えば中国語とか韓国語というのは今後出される予定はないんでしょうか。というのは、今上野を中心に来ている外国からの多くは、中国、韓国の方たちで、もちろん一時的に来られるだけなので、そこで都響をわざわざ聴き聞きに来る人はどのくらいいるか分からないですけども、まだまだ中国や韓国、優秀な演奏家は個人レベルではすごく多いですけども、団体という意味では日本のオーケストラほどのところは、唯一韓国のソウルフィルハーモニーなどはチョン・ミョンフンがいてから、かなり世界的レベルになってきているとは思われますけれども、特に中国では世界的レベルのオーケストラはまだないと思うので、理想的にはヨーロッパやアメリカに演奏旅行に行ければいいけれども、それもまた5年とか10年に1度あればいいほうですから、近隣の中国や韓国も含めて、アジアのところにもっと演奏旅行に行ったりするというのも、オーケストラのためには必要なことではないかと思しますので、そういった市場開拓も含めて中国語や韓国語でのウェブの充実ということも考えてみたらどうでしょうか。

それから、先ほど同じ後藤委員から動画の利用、ストリーミング配信とかというところが、これは都響に限ったことではないですけども、日本のオーケストラは余りできてないわけですけども、Medici.TVというのがあって、これはもちろんそれなりに投資が必要ですけども、多分ベルリン・フィルなんかも使っていると思うし、それからあとチャイコフスキーコンクールなんかも予選段階から全てこれでストリーミング配信をオンタイムでやっていたりしていて、すごく注目されているわけで、こういったことをどんどん利用していったらどうでしょうか。

それから、既に演奏回数で227回ということがありますが、ただ、よく見てみると、そのうちの90回はメンバーによるストリングカルテットも入っているので、こういうものももちろん必要だと思うんですけど、例えば平日の昼公演とかというのはどれぐらいやっていたらいいのでしょうか。

お昼の公演というと土曜とか日曜、祝日に限られるという部分、我々も思っていましたけども、今、藝大で木曜日にモーニング・コンサートというのを、優秀な学生のコンチェルトを藝大フィルが伴奏して木曜日の11時からやっていますけど、入場料1,000円いただいている、ほとんどいつも満席になります。当然ながらお客さんはほとんど高齢者の方たちですけども、高齢者の方たちは夜の演奏会に来れない。日曜の昼公演は大体常連の方たちで放っておいても毎回いっぱいになるんじゃないかと思えますけど、平日の昼公演というのは意外とやってみると今来てくれる人は多いと思います。しかも上野駅の真ん前にあるという立地を活かすことができれば、これは当然ながら、上野公園のほかの美術館や博物館との抱き合わせで人はたくさん来るわけですので。そういった中で、2時間のしっかりとしたコンサートでないにしても、文化会館の演奏会、ほかの団体が午後3時からゲネプロをやる前に演奏会が終わるようなことも、ランチタイムコンサートなんかできるわけで、そういった形でやるというのは。これ、演奏会をやったからといって収入になるとは限らないというのもよく分かっていますけれども、そういったことなんかも考えてもいいんじゃないかと思えます。

長くなりますけど、あと私の立場から言いますと、都響さんの場合はオーケストラ・アカデミーというのを今はやっていたらいいわけですね。もちろん有名なところではベルリン・フィル・アカデミー、かつてのカラヤンアカデミーがありますし、日本ではN響がやっていますけれども、都響さんもこういう取り組みで若い人を育てながら人材発掘にもなるし、そういう取り組みを考えられてはどうかと思います。うちの大学の場合は徒歩10分で来られるということもありますし、これは別に藝大に限ったことではないですけども、そういったことも考えられるのかなと思いました。

以上です。

【吉本副座長】 はい、どうもありがとうございました。それでは続いて中根委員、お願いいたします。

【中根委員】 中根でございます。先ほど住吉委員のほうからこの中で一番素人というお話がありましたけれども、私、自慢ではありませんがそれ以上の素人だと思います。

たまたま2年ほど前にドイツ大使をしていましたときに都響の皆さん方をベルリンにお迎えして、その際、大先輩の近藤理事長も一緒にいらして、そのご縁でこういう全くのクラシック音楽のずぶの素人である私がこの会議に呼ばれたんだと思います。東京に帰ってから日ごろ都響の演奏会を聴いて、大変すばらしいひとときを過ごさせていただいていることもあり、多少なりとも何か貢献ができたらいいなと思います。

音楽的な観点からのいろいろな提案とかというのは既に先生方からされています。私もいろいろ皆さんのお話を聞いて、どちらかという一般市民の立場から申し上げたいと思います。私自身の経歴としては、一番最後の海外勤務地がミュンヘンの総領事、それからウィーンの大使、ドイツの大使ということで、クラシック音楽のファンの方々に大変、羨望のまなざしで見られるという勤務地だったということもあって、多少、外国の例なんかも参考に、手短かにお話をさせていただければというふうに思います。

まず、1点目は、クラシック音楽というのは一部のエリートだけのためでなく、一般市民をどうやって引きつけていくかというのが一つ大きな視点としてあるのだらうと思います。そのやり方として、例えば私は歌舞伎・文楽が大好きでよく国立劇場に行くんですけども、国立劇場では本当に文楽とか歌舞伎をまだ一回も観たことのない人のために鑑賞教室というのをやっていて、いろはのいから始めて、実際に文楽や歌舞伎の短いシーンを見せてくださいます。学生、外国人、それから社会人、いろんなコースを作っておられます。クラシック音楽って、音楽の専門家の皆さん方はもう当たり前のことばかりかもしれませんが一般の方々にとってはクラシック音楽は小学校か中学校ぐらいでちょっと習ったぐらいで、あとは全然無関心という人が、恐らく大半だと思うんです。そういう人たちにしてみれば、そういう鑑賞教室的なものから入っていくというのは、一つのやり方としていいのかなという気がします。

それからいろいろ試みを、都響のほうでもされていると思うんですけども、私自身、実は去年JR東日本の大人の休日という、高齢者が入会するようなものですが、そこで30周年記念ということで大人の休日倶楽部の会員を募って第九を東京フィルと世界的なソリストおよび指揮者のもとでやろうということで、一般公募しました。これは私も一般公募で、倍率が10倍だったそうなんですけど、それに幸い当選しまして、10回練習をして——10回というのは少ないと思われまじくても、午前・午後と5時間ぐらいで——それで舞台に立ったのだから随分な度胸だと思われるかもしれませんが、ただ、定員が恐らく80人ぐらいだったと思うんですけども、その10倍ぐらいの人が参加を

希望して、もちろん第九自体、合唱で参加したことがあるという人が半分ぐらいいましたけれども、それにしても本当にちゃんとやっている人ではなさそうな人が多かった。そういうことからすると、そういう一般市民参加型の演奏会というの、そういう意味ではいろんな人の参加により関心を高める効果があるのかなという気がします。

それから、先ほど澤学長からお話のあったランチタイムコンサートというのは、実はベルリン・フィルも定期的にやっていて、これはたしか無料だったと思うんですけど、そういうことによって関心を広めていくというのも一つあるでしょうし、それから、子供たち、都響さんもいろいろやっておられるようですけども、ウィーンのオペラ座なんかは、そのシーズンにかかるオペラに合わせて子供向けの演奏会なんていうのを、日曜日にやるとかというようなこともやっています。そういうこともツールなのかなという気がいたします。

それからもう一つ、人の関心を呼ぶという意味では、上野はたくさん美術館がありますので、そういう絵と関係のある曲を、実際に絵のある美術館で演奏するというのもミュンヘンの美術館で経験しましたが、そういうのも一つのツールになるのかなという気がいたします。

2つ目は、既にお話が出た企業スポンサーの件です。楽天がスポンサーになっているというお話がございましたけれども、ウィーンのオペラ座もレクサス、トヨタが大スポンサーになっていたりするので、先ほどのJRの例もありますように、企業にとってみればクラシック音楽を一生懸命支援しているというのは、それなりにいいイメージをつくり上げるということになることに価値を見出していると思います。そういう地道な努力も必要かなと思います。昨今そういった文化活動に熱心な企業というのはひところより大分少なくなってきたと聞いていますので、簡単な話ではないと思いますが、試してみる価値はあるのかなという気がします。

それから、3点目は、これも澤学長からお話ありましたけれども、インバウンドの訪日観光客、これは私がちょうどドイツに行く前に大震災があって、2011年はグッと減ったんですけども、去年はそれから1,800万人以上になっていて、この期間、4倍以上、5倍に近い伸び率を示し、その半分が中国と韓国ということです。今、いろいろ言われているから皆さんもご存じだと思いますけれども、インバウンドの観光客たちが夜、何をするかというのが一つの大きなテーマになっていて、ちまたではショーに連れて行くとか、いろいろやっていますけれども、ぜひそういうところで何か外国人、とりわけアジアの人たちに関心をひくようなプログラムを都響さんでもつくって、やるというのも一つ大

きな今後の考えていただく点かなという気がします。

それから、最後になりましたけれども、4点目として、東京都の交響楽団ということで、これはヨーロッパでいろんな政府関係、あるいは自治体の式典の実施という、必ず音楽演奏というのがプログラムに入っているんです。そういうものにすでに都響も何らかのかわりがあると思いますが、そういうお堅い行事で、話ばかり、挨拶ばかりではつまらないということもありますので、それを音楽で包むという言い方をしますけれども、そんなことも一つ考えていいのかなと思います。

最後に、ウェブサイトでチケットを外国から買えないという、これはすぐ改善されたほうがいいのではないかということを申し添えます。

以上です。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。では湯浅さん、お待たせしました。よろしくをお願いします。

【湯浅委員】 かなり皆様のご発言でいろいろなアイデアが出たかと思いますが、私は英国の公的な国際文化交流機関で働いておまして、音楽の専門家ということではないので、どれほどお役に立つかと思っておりますが、仕事を通してオーケストラですとか、劇場、美術館、博物館、フェスティバル関係者、英国のそういったアートの現場で働いた方々とお会いして、一緒にお話を聞く機会も多くあります。

現在、英国と日本では共通の課題が多くあると思います。経済的にも厳しいこともあり、文化に対する公的助成も削減傾向にあります。、また、日本と同様、少子高齢化という課題にも直面しています。

その中で、英国の芸術機関がより文化、アートを通して社会に広く貢献していくためにさまざまな取り組みをしています。今回の会議の中で、そうした取り組みも共有させていただきたいと思います。また、この会議の議論を英国の皆さんにも共有させていただき、今後の国際共同につながっていけば通っています。

英国の文化芸術団体というのは、経済的にも社会的にも様々な課題を抱えている中、各団体が、新たなビジネスモデルを確立し、社会に大きく貢献することに努力しています。通常、劇場やコンサートホール、美術館に行く人は、社会の中の一部の人でしかありません。チケットを買って文化施設に来ない、多くの人が社会にはいます。ある英国の劇場関係者は、社会には目に見えないオーディエンス (invisible audiences) がたくさんいて、そうした人々にいかにリーチアウトして、そして貢献をしていくのかということが大事

だと話していました。

簡単に、英国の例を紹介させていただきたいと思います。マンチェスターにマンチェスター・カメラータという室内楽の団体があります。ここの活動が非常に革新的でして、昨年のThe Royal Philharmonic Society Music Awardsを受賞したり、Association of British OrchestrasでCEOのボブ・ライリーさんがベストオーケストラマネージャー賞を受賞しています。

このCEOのボブが素晴らしいリーダーで、彼が掲げているオーケストラのビジョンは「Redefining what an orchestra can do」、オーケストラができることを再定義するというものです。そして、オーケストラの目的として音楽を通して素晴らしい体験をつくり出し、そしてその音楽があらゆる人にアクセスがあり、そしてそれにより地域社会変革を促していくということをうたっています。

もう一つ、オーケストラの中心的な価値（コアバリュー）としてイノベーション、コラボレーション、ダイバーシティを掲げています。彼らのウェブサイトでもabout usのセクションにこれらのことが書かれていますが、とてもシンプルで分かりやすい表現で、明確に団体のビジョンが書かれています。今回の会議は、東京都交響楽団の新しい将来像を描くということだと思いますが、その将来像を描くプロセスの中で、明確なビジョンを設定し、そしてどのような変化を起こしていくのか皆さんと考えていきたいと思います。マンチェスター・カメラータは、コンサート活動だけでなく、あらゆる層の人々を対象に様々な取り組みをしています。マンチェスターの有名なクラブシーンでハシエンダというのがありましたが、ハシエンダ・クラシックというプログラムを立ち上げ、普段クラシックのコンサートに足を運ばない若い層にもとても人気になりました。こうした取り組みの成果もあり、2015年は、観客数が5万人だったのですが、翌年には15万人に伸びたそうです。もう一つ革新的なのが、コミュニティのプログラムにとっても力を入れています。劇場に来ない赤ちゃんから、子育て世代のお母さんから、特に有名なのが認知症の方、高齢者の方などあらゆる人を対象にプログラムを行っています。認知症の方を対象としたプログラムでは、マンチェスター大学とリサーチ連携をし、実際に音楽、特に参加型の音楽プログラムが認知症の人にどのような効果があるのかということを検証しています。本日の配布資料を見せていただきましたが、年間とても多くの事業をされていて、コンサートにも多くの観客が参加しているのが良くわかります。ただ、いまアクセスをしていない層の人はだれなのか、そういったことがわかるようなデータがあれば、そういったことをお示

しいたきながら、こういった会議を進めていく必要があるのかなと思いました。

あともう一つ、今お話ししたようなコミュニティのプログラムにおいては、プログラムの結果どういう変化をもたらすのか、アウトカムを明確に設定することが大事です。スコットランドのアーツカウンシルである、クリエイティブ・スコットランドが、子供を対象に音楽のプログラムをここ数年力を入れて実施しています。そのユース・ミュージック・プログラムについて、ロジックモデルを構築し、大きく4つのアウトカムを設定しています。そして、プログラムを実践しながら、設定したアウトカムについて効果検証を行っています。本日の配布資料で、事業報告書を見せていただきましたが、実際に幾つのコンサートをして何人が参加したかというのは分かるんだけど、じゃあ一体それがどういう社会変革とか、子供たちのどういうことにつながったのかということがあまり書かれていないようです。

今後、日本でもオーケストラだけではなくて、ホールや美術館など、文化芸術団体も、プロジェクトのアウトカムを設定し、検証することが求められてくると思います。英国の芸術団体も、そうして集積したエビデンスを持って、新たなパートナーシップを獲得するための説得材料として使っています。最後に、そうしたことを可能にするために大事なのが人材育成ではないかと思います。明確なビジョンと目標を立て、効果を検証し、そして多様なセクターを説得できる事務局のスタッフの育成、また英国の教育プログラムのほとんどが参加型の音楽づくりを基本としています。そういった、新たな手法で人々と関わる音楽家をいかに育成するのかということも大事ではないかと思います。

【吉本副座長】 はい、ありがとうございます。1人5分という設定は端から無理だったということではありますが、私も今日1回目なので発言をさせていただければと思います。

先ほど定期会員になったのは都響が最初だったという方が何人かいらっしゃったんですが、私は定期会員になったのは東フィルが最初でした。そのときに大野さんが若手で指揮者に就かれていたころで、私は初台の東京オペラシティの仕事をしていましたから、その関係からでした。私の30代の10年間は初台の新国立劇場とオペラシティの開発に没頭したような時期でした。

当時、武満さんに委員会の座長になっていただいて、オペラシティのコンサートホール等々の将来像を検討いただいたというようなこともありました。残念ながら武満さんは開館の1年半ぐらい前に亡くなられたんですけど、その後、国塩さんがプロデューサーに就

任されて、コンサートの企画を武満さんの遺志を継いでやってこられたというようなことがございます。

最近では、3年前に、アフィニス文化財団さんから研究所に依頼をいただきまして、オーケストラのこれからのあり方についての調査研究というのをさせていただきました。ご存じのように、アフィニスさんは国内オケを支援する、特に地方オケですね、ということだったので、そのための調査だったんですけども、海外のオケも随分リサーチしました。イギリスのオケは湯浅さんにも協力いただきました。

そういう観点から、今後の都響のあり方として私も3つほど申し上げたいと思います。先ほどいろんな方がおっしゃっていましたが、都響の特徴というか、特性として踏まえるべきことは、都立というか、都が支援をする自治体のオーケストラであるということと、もう一つ、日本の首都のオーケストラであるということだと思います。前者に関して申し上げますと、やはり教育プログラムだとか、コミュニティ向けのプログラムだとか、まだまだいろんな工夫の余地があるんじゃないかなという気がいたします。大野さんも先ほどサントリーホールのお話をされていましたが、特にアフィニスの調査で海外オケをリサーチして、これからのオケのあり方ということで質問すると、ほとんどのオケが地域向けのプログラム、教育向けのプログラムのお話になるんです。演奏会の話はゼロとは言いませんけど、それぐらい地域や市民、子供たちとどのような関係を構築するかということにすごく熱心に取り組んでおられて、もちろん都響さんもいろいろやっておられると思いますが、そこはまだ改革の余地があるような気がいたします。

その調査の中ですごく印象に残っている例の一つだけ、バーミンガム市響をご紹介します。バーミンガム市響はご存じのようにラトルが来て改革をされたわけですが、その歴史はもう過去のものだとおっしゃっていて、新たな地域向けのプログラムをすごくやっていたんです。その中で、何と子供向けの交通安全教室というのをやっているんです。それは子供たちが道路を渡るときに右見て左見てみたいな曲をつくって、子供たちに覚えてもらうのですね、オーケストラと一緒に。バーミンガムは子供の交通事故が増えているというのが社会的な問題になっている。そのことにオーケストラとして何ができるかということを考えてのプログラムだと言うことでした。それは地元の企業の支援だったんですけども、そのワークショップのリーダーがセカンドヴァイオリンの第一奏者なんです。オケがこんなことまでやるんだとすごく驚きました。都響がそこまでやる必要があるかどうかわかりませんが、そんな例もあるということです。

二つ目に申し上げたいのは、これも何人かの方がおっしゃってましたけど、やはり観客をどうつくっていくか。とりわけオーケストラの観客って、どこも高齢化が課題になっていると思うんですけど、でも、例えばさつき澤学長が平日の昼間の演奏会とおっしゃっていましたが、むしろ日本は超高齢化が進んでいるので、都響の観客の平均年齢は日本で最も高いというぐらい、そこを逆手にとってはどうかと思いました。高齢者がすごくたくさん来ているとか、障がいのある人もたくさん来ているとか、外国人もたくさん来ているとか、マイノリティの方々も含め、多様な観客もどんどん受け入れているとか。普段演奏会に興味がない人たち、いろんなバリアがあって来られない方々が大勢いらっしゃるはずなので、そのバリアをどうやって取り除いていくのかということも戦略が必要だと思います。

それで、これもちょっとイギリスの例なんですけども、フィルハーモニア管弦楽団がやっていたプログラムですごくおもしろいのがありました。エサ・ペッカ・サロネンの指揮と楽団員の演奏の様子を特殊カメラで全部撮って、ロンドンのサイエンス・ミュージアムで、その映像が見られる展示がありました。どうなっているかという、エサ・ペッカ・サロネンの指揮の様子を彼の目の前の位置から見られたり、第一ヴァイオリンのグループの映像が流れているスペースに椅子が置いてあって、そこに座ると第一ヴァイオリンのグループの中に自分がいるようになるんです。そこで市民の人がヴァイオリンを持ってきて、そこでエサ・ペッカ・サロネンの指揮で楽団と一緒に演奏したりするんです。そういう体験ができるという、それを見るだけでも楽しい。サイエンス・ミュージアムなので、曲はホルストの惑星だったりします。だからクラシックの演奏会というか、オーケストラを市民に近づける努力というのも本当にいろいろ工夫があって、そこにIT技術を使ったりするということも当然あると思うんですけどね。もちろんお金もかかるし、都響も200回以上公演をやっている中でそういう余裕があるのかどうかは検討が必要ですけども、その辺もぜひ取り組んでほしいと思います。

そして、3点目はやっぱりオリンピックですね。64年のオリンピックを機にできたオーケストラですから、今度のオリンピックで黙っているわけにはいかないんじゃないかというのが私の感じていることです。2020年のプログラムもかなり内容は固まっているかもしれませんが、でも例えば開閉会式も含め都響が関われる可能性はあると思います。開閉会式に関してはこの間企画チームが発表されて、そこが検討を進めるとは思います。例えばロンドン大会の場合、LSOがon Trackという子供たちと一緒に演奏する

プログラムを五輪の何年か前に立ち上げて、本番の開会式でも演奏したんですよね。そんな例もありますから、開閉会式で都響が出て大野さんが指揮するというのは、主催都市ですから、当然の権利なんじゃないかとさえ私は思います。開閉会式への関わりも含めて、ぜひぜひオリンピックで何かをやっていく、それが都響設立から50年たって、また次の新しい都響のステップを踏み出すきっかけになるみたいな、そんなふうになってほしいと思います。

ということで、あと5分弱になってしまいました。本当ならここでいろいろ皆さんと意見交換するところですが。その時間はありませんが、近藤理事長からもし皆さんの意見に対してコメントがあれば。

【近藤理事長】 ありがとうございます。そうそうたるメンバー、それこそ実演される方、ホールの館長、研究者、評論家、ジャーナリスト、外国の大使、外国の公的機関、さまざまな多様な方々のご意見を伺える、非常に楽しみにして参りましたが、今日は初回だから自己紹介だけであっさり終わっちゃうかなと思ったら、あにはからんや、すばらしい意見がどんどん出てきて、大変、懇談会を始めてよかったと思います。これからが非常に楽しみです。

個別の点にコメントする時間はございませんけれども、私が就任してから悩んでいたのは、どうやってレベルをアップして、それこそ実質的にベルリン・フィルなのか、ウィーンフィルかわかりませんが、同レベルになるのか、それをどうやって周知させるのかということ、将来の観客を育てる、クラシックを子供にどうやってリーチアウトしていくのか。そしてその中間、ポストクミみたいな感じで、好きな音楽をやっているんだけど、なかなかコンクールで2位だったから声がかからないとか、そういう学生さん、研究者はたくさんいらっしゃる、そういった方にも何かできないか。でも三つ全部やるのは、それは時間も限られている、予算も限られている。どこにどういう重点を置くのが都響の役割なんだろうかなどと考えてきたんですけれども、今日いただいたいろんな話は、それぞれ参考になりましたし、オーケストラに将来はあるかというのは本当に切実な問題だろうと思います。特にITが発達して、録音がどんどん技術が進んでいく。特に生でなくたっていいじゃないかということになってしまう。でも生の雰囲気、オーケストラの楽員と指揮者と観客が、何か目に見えないインタラクションがある。その味というのは絶対になくならないはずだと。そういう中で、しかしいいCDを聴いてそれなりに、わざわざ行かなくてもいいということになってしまう。そういうITもいろんなチャレンジを発していき

いと思います。

そういう中で今後、数回にわたってご意見を伺うことになると思います。どうぞよろしくお願いいたします。今日1回だけでも懇談会を始めてよかったなど、つくづく思っています。ありがとうございます。

【吉本座長】 ありがとうございます。終了の予定時間を過ぎておりますけど、もう一つだけ今日決めておかなければいけない事項があります。次回以降のことなんですが、事務局から今ペーパーをお配りいただけますか。

2回目以降の進め方なんですけれども、第2回は6月から7月ごろということで想定されています。2回目以降、その都度テーマを設定して、そのテーマに基づいて3名ほどの委員の皆さんから都響の今後のあり方についてご意見を頂戴するため、プレゼンテーションをしていただき、それに基づいて意見交換をするということで進めさせていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

事務局から今配られた案について簡単にご説明いただけますか。

【赤羽事務局長】 お時間いただきましてありがとうございます。今、素案ということでお手元にお配りさせていただきましたけれども、第2回の懇談会においては2020年の東京オリンピック・パラリンピック以降のオーケストラを取り巻く状況と今後の展望ということで、片山委員、後藤委員、湯浅委員。第3回目が10月～11月ぐらいで、オーケストラに求められる多様な活動と社会的役割というテーマで、石田委員、澤委員、吉本委員。裏面にいきまして第4回、翌年の1月～2月で、東京都交響楽団の今後のイメージ戦略ということで、今後の新たに取り組む事業展開や広報戦略などを切り口に、池田委員、住吉委員、堤委員、中根委員ということで考えさせていただいたところです。ただ、本日いろいろご意見をいただきましたので、ご意見をもとにもう少し具体的なところを調整しながら進めていくことでもいいのかなというふうに思っております。

【吉本副座長】 はい、ありがとうございます。

これ、三つのテーマは素案ということなんですが、私はこのテーマよりこっちのテーマがいいとかというご意見も委員の方にもあると思います。事務局とそれぞれの委員の先生方でやりとりをしていただいて、これをベースにテーマ、人選等含めて調整をいただいて、それぞれの委員のご専門から一番いいご発言をいただけるようにするというので、よろしいですか。

【池田委員】 今日の発言内容で、意外な人が意外なことに関心を持っていることが明らか

かにもなりましたので、担当テーマの割り振りを再度シャッフルをしていただきたいと思います。

【吉本副座長】　　ということで、今日のご発言をベースにしてテーマの設定し直しも場合によってはあるかもしれませんが、事務局に検討いただいて、それを堤座長と私のほうで一度相談した上で、もう一度皆さんにお諮りして決めるということによろしいですか。

では、そういう形にさせていただきます。

それでは、ちょっと進行がまずくて、予定の時間を若干過ぎましたけれども、第1回目の懇談会を終了したいと思います。

どうもありがとうございました。

(午後6時35分閉会)